

## □伊勢湾台風の影響と洪水多発地帯の 防災について

—輪中と伊勢湾台風について—

### 輪 中 の 郷

輪中地域での伊勢湾台風の影響や今後起こりうる可能性の高い巨大台風に対応する防災について、各研究者や研究機関が、それぞれの見解を出している中、あえて輪中の郷としての伊勢湾台風の影響状況と防災について語りついでいきたいと思う。

#### 1. 輪中地域(特に長島)における伊勢湾台風の影響が起こるまでの状況

各地の講演会で述べられてきたように、伊勢湾最奥の地である長島地域は、海部郡南部や名古屋市南部等の大規模災害の地と同じような影響が生じたことは紛れもない事実である。過去の災害を見ても風水害による影響では最大級のものであることは各種の記録を見れば、その実態が判明する。すなわち9月21日にマリアナ沖で発生した台風15号は、9月23日には最大勢力の894mb(あえて当時の表現どおりにする)に発達し、日本への上陸を伺う。当時の記録を見れば、まだレーダーもなく、実際に飛行機を飛ばしての観測であったが、1956年(昭和34年)9月26日午前11時にはこの地方に暴

風雨警報が発令された。このことは直ぐに各機関や学校などに通達され、これを受けて当時ほとんどの学校が翌日の27日(日曜日)運動会であったため、午後からの準備を取りやめ、子供を帰宅させた。

なお、当時の運動会は地域全体での祭りの要素を持ち、稲の収穫前のひと時の休息でもあった。当時のことを記憶する人に聞くと、なぜ急に帰宅させられたかもわからないようで、台風が近づいているような天気ではなかったと述べている。また午後2時頃には少し風が強くなり、その1時間後には堤防に立つと飛ばされそうな風がふきはじめたという。しかし、まだ台風が近づいているような状況ではなく、ラジオなどの情報を聞きながら半信半疑台風の備えをし始めていた。当然ながら当時のラジオは、真空管方式の電源が必要なものがほとんどで、携帯ラジオはあまり普及しておらず、テレビのある家庭もほとんどなかった。ましてや天気図は新聞発表のもので判断するために、情報の伝達は相当遅かったと思われる。また、「伊勢の国の南の入り口には伊勢神宮があり、神様の本家だから、台風=神風が神のおわすところに来るはずはない」という

俗説がまことしやかにささやかれており、実際当時の人々の記憶に残る大型台風は、ほとんどか四国や九州、若しくは太平洋岸や伊勢湾の東を通過する 경우가多く、直近の大型台風である13号台風でも大きな被害はなかった。このため、俗説とあいまって明治の三川分流工事後の河道の変更と堤防の強化による洪水の激減から、改修後の堤防は決壊しないという考えが住民に少なからずあったことは確かである。

そこで住民が台風対策として取った行動は、雨戸を閉め、その上から戸が風で吹き飛ばないように板や角材を打ち付ける作業を行った。このため台風が近づいてくるとどの家も早めの夕食を雨戸の閉まった電灯の下で済ませた。当時の家は、木造でまだ茅葺（この地方では葦葺）の家も多く、数十センチメートルから数メートル積み上げた土台の上に土台石を置き、その上に柱を載せる在来工法での住宅が多く、洪水時には壁土が流されてしまえば、木と紙だけが残るような構造であった。

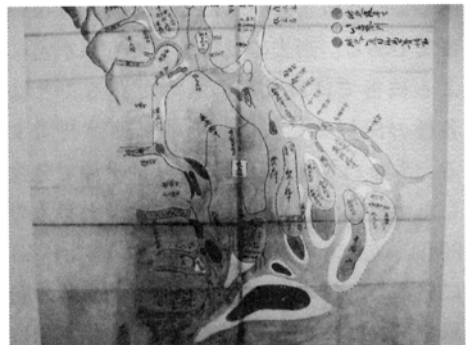
当時の事を住民に聞くと午後5時頃には相当強い風や雨が降っていたそうだが、（ほとんどの家では台風準備で詳しい状況はわからない）青年団活動を催そうとしていた人たちは、まだ翌日に備えて準備を行っていた。午後6時頃にはさらに風雨も強くなり、外へ出られる状況ではなく、家の中で台風情報に耳を傾けていた。しかし、早いところでは午後6時から7時の段階で停電となり、まだ実際には外はほの明るいはずにも関わらず、暗い屋内で情報もなくたずんでいた。

この時間帯には既に水防係りや水防団

（消防団）など水防に関わる人達は、堤防の見回りを行い始めており、堤防の警戒中のトラックが、堤防を乗り越えてきた高波をかぶったという情報や、既に堤防が決壊しかかっているというような情報が、本部には伝わり始めていた。しかし、本部自体も詳細な情報が伝わらないため、午後7時頃には住民に対しての避難勧告が出されたようであるが、住民に対しての情報伝達の手段もなかったため、自主避難が若干行われた。

## 2. 輪中地域の水害について

そもそも輪中地域は、洪水の多発地帯であり、洪水と共に生きてきたといっても過言ではない。三年一作、五年一作という言葉が残っているように三年に一度収穫があれば豊作。五年に一度でさえ平作といわれるほど、水には悩まされてきた。しかし、一般にいわれているように水との戦いという考え方は、あまりしない。逆に水を受け入れてきたような認識があるように思える。現在



のように木曾三川が完全に分流され、巨大な堤防に囲まれるようになる前。

また、河川や堤防などの構築物が法律によって規制される前。破堤による入水は、上流からの肥沃な土砂の流入を意味し、更地効果による豊作が約束されるからである。現在のわれわれと違い、輪中の生活では、家財道具が豊富にあるような家はほとんどなく、雨風が防げれば後は生活していく食料と農具、舟等があれば十分に生活できた。だから、輪之内町の水防議定書にあるように川の水が五合目までくれば見張り番が立ち、七合目までくると村中の鉦や太鼓が打ち鳴らされ、家財道具が天井裏等へ取り片付けられ、八合目までくれば早鐘は屋太鼓が鳴り響き、成人男性は全員水防小屋へ招集させられた。これが輪中における水防共同体であり、村落におけるコミュニティーとして近年まで活動をしていた。但し、これらの水防活動は、河川の氾濫や河川堤防の決壊を想定しての活動であり、海水、高潮の警戒のための活動ではない。輪中における水害とは、河川堤防の決壊であるため、輪中における下流部からの浸水を想定しているものでなく、上流部からの浸水を想定している。このため堤防が決壊しても、輪中の上流部の堤防の一部分だけが決壊するだけで、堤防そのものはほとんどそのままの状態であり、実際に調査すれば、輪中の集落はその堤防上に立地する 경우가多く、そのため列状に集落が形成していることが多い。また、上流部の一部の決壊による入水は、輪中独特の地形である上流部が狭く、下流部が低い構造のため、また上流部と下流部の高低差も然程ないため、いったん輪中内に入水し

た水は放射状に広がり、流入したときの勢いは徐々に小さくなる。このため輪中には、「堤防が切れたら、堤防へ逃げろ。」という言葉もあるほどで、また、堤防の決壊から自身の家まで、多少の時間がかかるため「堤防が切れたら、イモを洗え。」という言葉も残っている。これらは河川の増水による堤防の決壊は、堤防上が最も安全であり、水害時に最も大切なものが、食料であり、当座の食料を確保するというみでの「イモを…」という言葉ができたものと思われる。

また、洪水の時にはすべての戸を開け放して、家の中を水を通したといわれている。

これは、当時の家が土台の柱にのっているだけのため、戸を閉めておけば、洪水時の水流によって家自体が流失してしまうからであり、前述の七合目まで水が来ると家財道具を片付けるというのも、このためである。但し、浄土真宗の門徒が多数を占めるこの地域では、仏壇に対しては他地域よりも多くの費用を掛けるため、(一説には家と仏壇は同じ費用といわれている)重く大きな仏壇は、天井の上の大きな梁に滑車をつけ、天井裏まで引き上げるような構造になっている家屋も多数存在していた。実際その後の聞き取りでは、伊勢湾台風の折には北部地区においては、その作業が行われており、水の浸入の勢いも関わるが、昔からの構造がそのまま生かされている。また、長島でも中部地域以北では江戸期から続く、水屋という水害時の避難場所を個々で持つ習慣もあり、堤防際以外で直接の水の浸入がなかったところは、水屋に逃れることによって助かったという記録も残っている。江戸期には東の木曾川堤防と西の揖斐川堤防(当

時は長良川は木曾川と上流で合流) 結ぶ井桁とよばれる堤内地の堤防が作られ、長島の上郷と下郷にわけられ、どこが破堤しても上下のどちらかが水害からは免れるという政策が取られた。



### 3. 輪中地域(特に長島)における被害の状況

記録などを見ると、この地域での最初の破堤は、桑名市の城南地区と思われる。ここは、明治期の分流工事によって干拓された地区であり、揖斐川の最下流にあたる地区である。昔から4刻、8刻、12刻という言葉があり、揖斐川では長島での雨の降り始めから8時間後、長良川では16時間後、木曾川では24時間後に河川の増水が見られるという意味であるが、これは河川の流域面積と同時に河川の高さにも関連し、揖斐川が最も低い位置を流れることから、伊勢湾台風時にも揖斐川からの増水が高潮の影響を受けて破堤に結びついたものと考えられる。時刻は午後7時30分から8時の間と思われる。しかし、この頃には既に電気は止まっており、真っ暗の中での災害であったため正確な時刻はわからない。このため、長島での決壊は揖斐川沿いの海岸堤防から始まるが、時刻は午後8時前後といわれている。またその後、午後9時頃までに名古屋市南部や木曾岬村の堤防が破堤している。

そこで長島の堤防の破堤と被害について大まかな考察をしてみると、最初に決壊したのが、揖斐川沿いの松蔭地区の堤防であり、若干の間をおいて長島海岸の海外堤防2箇所が決壊。この三箇所の決壊から入り込

んだ高潮は、松蔭地区の中部の旧輪中堤防と木曾川堤防が交わる所に向かって下流から上流に向かい、一点に水勢を集中させていったものと思われる。そのため、松蔭中地区の東部と松蔭東地区では大量の海水が一気に押し寄せきて、家屋をそのままの状態の木曾川堤防を越えて流れ出したといわれている。またその一部の水勢は北隣の横満蔵輪中に流れ込み、白鷄地区の揖斐川堤防が破堤した水と共にこの地区の北端に押し寄せ、またそのほかの破堤したところから入った水と共に旧青鷲川の堤防上の福吉の集落に襲い掛かったと思われる。

つまり下流から入った水が、木曾川堤にぶつかりながら新たに破堤して入ってきた水と共に北辺・北辺へと集落を押しつぶしな

がら北上していった。また、揖斐川及び長良川の堤防が各所で決壊し、下流からの浸水と共にその勢いを増し、決壊の直撃を受けたところは当然のごとく家屋ともども流されてしまい、高潮による決壊によって浸水してきた海水は、旧輪中の東北隅へ向かって収斂化現象を起こし、濁流となって押し寄せた。当時、長良川の警戒に当たっていた水防団や水防の係りは、当時の様子を

盛り上がった海が自分のほうに向かって落ちてきたというような表現であらわしていたり、堤防を警戒していたため自分の南北で堤防が決壊したために、その場所に取り残されてしまったというような話をしている。また、当時としては珍しかったトラックで見回りをしていた人は、破堤前にもかかわらず、堤防のあちらこちらでトラックの腹をこすったとっているので、破堤を免れたところでも相当に堤防が削られていたということがわかる。特に河川堤防のように護岸がコンクリートで被覆されていないところではこの傾向が顕著であった。

午後 8 時前後から決壊を始めた堤防は、伊勢大橋南の決壊を持っていったん収束する。このため、当時コンクリート舗装され始めた国道一号線で決壊で生じた浸水の速度がいったん収まるが、国道一号線を超えた浸水と伊勢大橋の南の決壊箇所からの浸水によって、旧の長島城下の商店街も大きな打撃を受けている。しかし、これらの浸水も当時の国鉄と近鉄によって勢いが弱められた。これは、鉄道の盛り土が、かつての井桁(東西の堤防を結ぶ堤内地の堤防)と同



じような堤防の役割を果たしたといわれている。しかし、このために破堤による浸水が止まったわけではなく、近鉄と国鉄を乗り越えて長島の北部地区にも浸水していった。国道一号線以北での破堤がなかったため、長島の北部地域では場所にもよるが、浸水の時刻は午後 10 時ごろだったというところもある。これは、当日の満潮が午後 0 時ごろということもあり、破堤による浸水がいったん収まり、満潮の前の上げ潮と台風の前最接近後の台風に向かって吹き込む海水の吸い込み現象によって、引き起こされたものと思われる。このためこの地区では他地域と比べ物にならないほど少ない人的被害であり、浸水そのものも翌朝夜が明けるまで知らなかったという証言もある。もともと北に高く、南に低い、東に高く、西に低い地形であることから当時の長島の北端では海拔は 0 メートル以上であり、集落の形成が、旧の輪中の堤防に立地し、その上、土台に土盛りもしくは石垣を積んでいる家屋が多く、床下浸水ですんだところもあった。また、最北端の集落は、明治時代の河川改修前は木曾川の堤防上にあった集落であったため、集落が立地する地面の海拔が 4 メートル近くも有り、屋敷に対しての浸水すらなかった。このように同じ長島で有りながら、



被害の状況も時刻も各集落ごとで、極端に言えば隣同士でさえその状況は大きく変わっていることをあわせて付け加えたい。

最後に現在では、ほとんどの堤防が7.5メートルの高さになり、各家には個別受信機

が備えられており、万一のときにも情報が入手できるようになっている。これらは、伊勢湾台風の教訓から行政が中心となって行われてきたものではあるが、他地域に比べて輪中の特性を生かしたものである。